
ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

ムウマージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

【Nコード】

N7159X

【作者名】

ムウマージ

【あらすじ】

星の衝突をまのがれて、さらに時の停止騒動も収まり、世界は真の平和が訪れたと思われていた
だが・・・そんな中、この世界に更なる危機に直面する・・・
それは、ほんの一つの出会いから・・・

もうさ、このストーリー次回作みたいのでok？

とかいう流れでオリジナルストーリー！

なんて思ったポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊の続編！

プロローグ（前書き）

はぁーい！ムウマーシです！

勢いで新小説投稿！

今回はD Pシリーズ？違うな、B Wシリーズだ！
という話

それではどうぞ！

プロローグ

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊 プロローグ

雷が鳴り響く嵐の空

「はぁ・・・はぁ・・・」

「もっと・・・もっと早く!」

嵐の中を飛ぶ一匹き、その背中に乗っている一人

『わかってる・・・わかってるよ!』

カツ

雷が落ちる

『あぁっ!』

雷が一匹の翼をかする

「わっ!」

雷が翼にあたり、バランスを崩したせいで。背中に乗ってる一人が落ちかける

ガシッ

落ちかけた所を一匹がギリギリ、手を掴む

『ぐっ……』

「……！離して！このままじゃあなたも落ちちゃう！」

『だめだよ！そんな……！』

「あなただったらきつとあれを見つけられるはず……！私は大丈夫だから！離して！」

カツ！

大きな雷が落ちる

『うわあああああ！！』

「きゃあああああ！！」

一匹と一人が離ればなれに墜ちて行く……

山の草原

嵐は過ぎ去り、雲一つないまっさらな空

そんな中、山にある草原に一匹のポケモンが倒れていた

『う……ここは……？』

『私……生きてるの？』

『うつ・・・駄目だ・・・意識が薄れて・・・』

『フライゴン・・・後はたのんだ・・・よ・・・』

『・・・』

そう言つと一匹のポケモンは気を失つた

プロローグ（後書き）

シェーイ！プロローグ 完！
次回ゆっくりしていつてね！

第1話 山の草原で（前書き）

い、い（。ん）ノデキマシタ
ソレデハドウゾ

第1話 山の草原で

第1話 山の草原で

山の中腹 居住区

ここはポケモン達が住む山の中腹にあるポケモン居住区

そこにいる一匹のミジュマル

「うわぁー！綺麗な虹ー！」

空を見上げながら言う

「・・・あれ？なんだろう・・・？」

首を休めようと下を向いた時、ふと、崖下の草原に草と別な物があるのが見えた

それを凝視する

「あつ！？ポケモンが倒れてる！？」

それがポケモンだとわかり、すぐさま、そのポケモンの元へと走っていった

山の中腹 山の草原

タッタッタツ・・・

倒れていたポケモンの近くに駆け寄る

「ねえ！大丈夫！？ねえ！ねえってば！」

倒れているポケモンを揺らす

「う・・・う・・・ん？」

倒れていたポケモンが目を覚ました

「よかつたあ・・・ねえ、大丈夫？」
ツタージャに呼びかける

「え・・・うん・・・ん！？」

それを聞いて、返したあと、驚きの声を漏らした

「？どうかしたの？」

「あ・・・あれ？おかしいな・・・？」

「なんで・・・なんでミジュマルが喋ってるの・・・！？」

・・・

「え？なんでって・・・あなたでしょ？ツタージャ」

「え・・・？わ、私はツタージャなんかじゃないわよ！私は人よ！」

目の前にいるツター ज्याの言葉に困惑する

「ええ！？で、でも、どこからどう見たって、ツター ज्याだよ！」

「そんな訳・・・」

ツター ज्याが自分の手を見て、硬直した

「え・・・？」

ツター ज्याが手から滑るように体に目をやった

「な、な、な、な、なにこれえ！？」

「嘘でしょ！？なんで私ツター ज्याになったになってるの！？」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫な訳ないわよ！！」

「と、とにかく落ち着いて！冷静に考えよ！」

ツター ज्याを落ち着かせようとする

「う・・・うん・・・」

ツター ज्याが落ち着いてくれた

「それで・・・あなたは どうしてツター ज्याになったか分かる？」

「わかってたら、こんなに騒がないよ・・・」

「そうだよね・・・」

正論である

「それに・・・」

「それに？」

「なんでかわかんないけど、人間だった時の記憶とかほぼ覚えてないの・・・」

「覚えてない・・・？」

「うん・・・あ、でも、一つだけ覚えてる事があるの・・・」

「一つだけ・・・？それって・・・何？」

「名前・・・私の名前・・・」

「どんな名前なの？」

「えっと・・・リン・・・」

「リン・・・ていうんだ・・・」

リン・・・それが目の前にいるツタージャの名前なのだろう

「うん・・・」

「けど・・・人間がポケモンになるなんて・・・ありえるのかな・・・」

「それって、私の話、信じてないって事!？」

「ち、違うよ!リンの話は信じてるよ?」

「でも、何が起きたら、人間がポケモンになるんだろって・・・」

「・・・」

ツタージャが首を下ろす

「ご、ごめん、なんかひどい事言ったかな・・・?」

さっきの自分の言葉がいけなかったのだろっと思ひ、謝る

「ち、違うよ・・・ただ、これからどうしようって思ってたね・・・」

「・・・」

ポトツ

ミジュマルが持っている貝から何かが落ちて、転がる

「あ、待って!」

ミジュマルはそれを追っていった

ミジュマルが落とした物は地面に空いていた穴に落ちていった

「あゝ!!」

「ど、どうかしたの?」

「わ、私の宝物が・・・落ちちゃったの・・・」

「穴・・・?」

リンがミジュマルの近くに寄る

「・・・この穴に?」

「・・・うん」

「・・・」

リンがその穴を覗き込む

「・・・大分深そうね・・・」

「一緒に取りに行つてあげようか?」

「え!?!ほ、ほんと!?!」

「うん、一応助けてもらつたし・・・」

「あ、ありがとう・・・!」

「別に良いって、あのさ、なんかロープみたいのない？」

「ロープ？わかった、取ってくる」

そう言うとミジュマルは自分の家へと走っていった

タッタッタツ・・・

「おーい！取ってきたよ！」

ロープを持って、ミジュマルがツタージャと合流した

「はい！」

「ありがとう」

ミジュマルからロープを受け取ったツタージャが礼を言う

受け取ったロープを近くにあった木に縛りつけ、もう一方の方の穴へと降ろした

「ところでさ、落とした物って何？」

「えっとね、丸くて、小さいんだけど、赤い色してるの」

「赤い色ね・・・」

「わかった、降りましょ！」

「うん！」

二匹がロープをつたって、穴に降りていく事にした

第1話 山の草原で（後書き）

、イ（°A）ノカンデス
ジカイモユツクリマツテテネ！

第2話 ダンジョンへ（前書き）

大変お待たせしました

理想の搜索隊、第2話完成しました
それではどうぞ！

第2話 ダンジョンへ

第2話 ダンジョンへ

崖の洞窟

リン達は、ミジュマルの宝物を探すために、洞穴の一番下まで降りてきた

そして、リン達が、洞穴の探索を初めてからしばらくして・・・

「なんなの・・・このありえないくらい複雑な道は・・・」

リンが呆れながらに言う

「はあ・・・何よここ・・・まるでダンジョンじゃない・・・」

「ダンジョン・・・？あ！」

ミジュマルが何かを思い出したようだ

「どうしたの？ミジュマル・・・」

「ダンジョンって聞いて思い出したんだけどさ、こんな風に道が複雑な所を不思議のダンジョンって言うらしいの」

「不思議の・・・ダンジョン・・・？」

リンが不思議そうに聞き返す

「うん、本とかに書いてあったんだけど、不思議のダンジョンは、入るたびに地形が変わっちゃう所らしいの・・・」

「地形が変わる・・・？」

（地形が変わるなんて・・・そんな事ありえるの・・・？）

「でも、なんでこんな所が・・・？」

「原因は星の温暖化、詳しい理由は分かってないけど、そのせいでこのダンジョンが増えてるんじゃないかって言われてるの・・・」

「星の温暖化って・・・どどういう事？」

「最近、この星の全土で気温が上がってきてるの」

「でも、こつちの原因はまだ不明みたいで、色々と調査してるんだって・・・」

「ふん・・・」

（ダンジョンが増えてる事と星の温暖化・・・か・・・）

「取りあえず・・・早く探し出して、外に出ましょ」

「うん」

サツサツサツ・・・

しばらくして・・・

「さっき、階段みたいなのを見つけたから、降りてみたけど・・・」

「まだ続いてるんだね・・・」

「はぁ・・・何処に転がっていったのやら・・・」

ため息混じりに言う

ザッ・・・

「え？」

ザッザッザッ・・・

足音が聞こえてくる

「足音・・・？」

「私たち以外に誰かここにいるの・・・？」

「もしかしたらね・・・」

ザッザッザッ・・・

足音が段々近づいてきてる事に気づく

「近づいてきてない・・・？」

「え・・・？」

ミジュマルが耳を立てる

「ほ、本当だ・・・！」

「ど、どうするの？」

「どうするって言われても・・・」

ザッザッザッ・・・

その間にもどんどん足音は大きくなっていく

「か、隠れる場所は！？」

辺りを見回す

身を隠せるほどの草もなく、逃げ込めるような道も足音が聞こえてくる方向にある道しかない

「に、逃げ道なし・・・？」

「ど、どうしよう・・・」

「・・・」

リンが身構える

それにつられ、ミジュマルも身構える

ザッザッザッ・・・

足音の主が通路から出てくる

ヨーテリーだ

「な、なんだ・・・普通のポケモンじゃない・・・」

ミジュマルが身構えるのをやめる
だが、リンは身構えるのを止めなかった

「リン・・・？どうかしたの？」

「なんか・・・あいつ、変な感じが・・・」

「変な感じ・・・？」

ヨーテリーがリン達の方を向く

「ミジュマル！気を付けた方がいいかも・・・！」

「え？気をつけた方がいいって・・・」

「・・・！、ミジュマル！前！」

「へ？」

ミジュマルが前に振り返る

ヨーテリーが走ってきている！

「え!？」

「まずい・・・!」

タッタッ!

リンがミジュマルに走り寄る

「うわっ!？」

ミジュマルをヨーテリーの直線上から離れさせる

リンはすぐにヨーテリーの方へと目を向けた

ヨーテリーはズザザザと地面を擦りながら、止まろうとしていた

「ミジュマル、大丈夫？」

「うん・・・ありがとう・・・」

「いいのよ、それよりあいつ、攻撃しようとしてきたよね・・・」

「うん・・・」

「なら、攻撃しても大丈夫よね・・・!」

「え!?!まさか倒すつもり!？」

「だって、そうしなきゃ、落ちて置いてミジュマルの宝物を探せない

しね
「

「でもさ、リンってちゃんと戦えるの……?」

「……」

リンがフリーズする

「あ、リン!? おーい!」

「だ、大丈夫よ! きっと! うん!」

明らかに大丈夫のようには見えない

「無茶しないほうがいいよ……私に任せて……!」

「ミジュマルが……?」

「うん! 任せてよ!」

ヨーテリーがようやく止まり、こちらを向く

ミジュマルに向かって走っていく!

「よっ、と!」

ヨーテリーの攻撃を横に避ける

「体当たり!」

攻撃で隙だらけのヨーテリーにミジュマルは体当たりをする！

ドン！

ヨーテリーは前のめりに倒れる

「よっしー！」

「・・・」

（暇だなあ・・・）

ザッザッ・・・

リンの後ろから足音が聞こえてくる

「！？」

すぐさま、後ろを振り向く

後ろには、チヨロネコがいた

「わっ！」

反射的に後ろに下がる

「リン！どうかしたの！？」

ミジュマルがリンに声を掛ける

「他の奴が来ちゃったの・・・」

「待ってて！こいつを倒して・・・」

「大丈夫！私が倒すから！」

「でも、リンは技の出し方分からないんですよ！？」

「体当たりぐらいだったら、出来るはずよ！」

「・・・わかった、気をつけてね・・・！」

「わかってる！」

ザッ・・・

リンが戦闘態勢に入る

「さてと・・・さあ、どこからでも掛かってきなさい！」

タッタッタッ・・・

チヨロネコはリンに向かって走り出す！

「来たわね・・・！」

タッタッタッ・・・

チヨロネコは、リンとの間合いを詰めていく！

「・・・」

タン！

チヨロネコが地面を蹴り、空中に浮く！

「上！？」

チヨロネコがリンに向かって飛び降りていく！

「やばっ・・・！」

チヨロネコの攻撃を横に避ける

（だめ・・・間に合わない！）

ザシュ！

チヨロネコの爪がリンの手をひっかく！

「うぐっ・・・！」

すぐにその場から離れる

チヨロネコもリンから距離を取る

「いてて・・・」

「やったわね・・・！」

タッタッタ・・・

リンがチヨロネコに向かって走る！

タツタツタツ・・・

チヨロネコの目の前まで接近する！

「こん・・・」

ザッ！

リンがチヨロネコの直線上から横にずれる！

チヨロネコがリンの方を向く

「にゃろっ！」

ドン！

チヨロネコに全身でたいあたりする！

チヨロネコが少しだけ吹っ飛ばされる
が、すぐさま体制を立て直した

「よっし！」

うまく攻撃が入った事に喜ぶ

タツ！

チヨロネコがリンに向かって走る！

ザッ・・・

リンが構える

タッタッタッ・・・

ザッ！

チヨロネコがリンの横に素早く移動する！

「横・・・！？」

ザシユ！

「きゃあっ！」

リンの顔をチヨロネコの爪がひつかく！

「ぐっ・・・」

「リン！」

ミジユマルの声が聞こえてくる

ドン！

チヨロネコが何かに吹っ飛ばされる

「え．．．？」

チヨロネコはそのまま床に倒れる

「大丈夫？リン」

ミジユマルに声を掛けられる

「へ？う、うん、大丈夫．．．」

「よかった．．．リン。早く見つけて、帰りましょ」

「そ、そうね、また襲われたらやばいし．．．」

タッタッタツ．．．

「階段っぽい所を降りてきたけど．．．」

「なんか、ひらけた場所に出たね．．．」

先程までの複雑な通路とは違い、何もない所に出たようだ

「ここが一番下．．．って事かな？」

「多分ね．．．」

「あ！」

「どうしたの？」

「リン！見つけたよ！ほら、これ！」

ミジュマルが赤い宝石をリンに見せる

「わぁ・・・綺麗ね・・・」

「これ、この前、草原で拾った物なの！」

（草原で見つけたって・・・大丈夫なの・・・？）

ザア・・・

（・・・え？）

ザアア・・・

（な、なにこれ・・・）

（め、めまい・・・？にしては、なんか変な感じが・・・）

汝・・・草蛇の皮を被る者なり・・・

汝・・・人の心持ちし者なり・・・

（な、なんなの・・・この声・・・幻聴・・・？）

「リン・・・？おい！」

「へ？あ、何！？」

「いや・・・なんかぼーっとしてたけど・・・どうかしたの？」

「い、いや、なんでもないよ・・・ちょっと考えごととしてただけ・・・」

「ふうん・・・」

「それより、戻りましょ」

「そうね・・・」

ザッザッザッ・・・

第2話 ダンジョンへ（後書き）

はい、第2話 完 です
次回もゆっくり急いで行つてね！

第3話 ギルドに入門！（前書き）

はい、ゆっくりとしすぎたムウマージです

さうで、次は星だな・・・

それではどうぞ！

1 2 / 2 1 修正しました

第3話 ギルドに入門！

第3話 ギルドに入門！

山の草原

「ふう〜・・・なんとか出てこれたね・・・」

「うん・・・」

「さてと・・・それでリンはこれからどうするの？」

「どうしよう・・・」

腕を組んで考える

「・・・リン、ちょっと提案があるんだけど・・・」

「提案？」

「着いてきて」

そう言うと、ミジュマルは歩きだした
リンはミジュマルの後を追った

山の頂上付近

山を登っていき、頂上に近い一つの建物の前にたどり着いた

「ここは・・・？」

「ここは、ギルドなの」

「へ？ギルド！？」

あまり聞かない言葉に驚く

「うん、このギルドは、搜索隊のギルドなんだ」

「搜索隊の・・・ギルド？」

「搜索隊というのは、困ってるポケモンを助けたりとか、お尋ね者を捕まえたりとかそういう系の仕事をする職業なの」

いわば、警察に近い仕事・・・？

「それで、ここはその搜索隊の拠点みたいな所で、ポケモン達からの依頼とかがあるんだって」

「へえ・・・」

「・・・そういえば、ミジュマルはなんでそんなに詳しいの？」

「実は、うちのお姉ちゃんが搜索隊なんだ」

「へ、へえ・・・」

姉が搜索隊・・・凄いわね・・・

「それでさー！」

「へ？」

「私ね、リンとならいいチームになれそうな気がするの！」

「え？ちょ、ちょっと待って、それって・・・」

「お願い！一緒に搜索隊になって！」

「えええ！？」

私に搜索隊になれと！？

「で、でも私、搜索隊とかそう言う事、やれるような自信も実力もないし・・・」

「第一、私達、まだ会ったばかりだよ！？」

「うん、たしかにそう・・・だけどね、私、リンとなら立派な搜索隊になれると思うの！」

「それに・・・リンがポケモンになっちゃった理由もわかるかもしれないよ？」

「・・・」

ポケモンになっちゃった理由・・・

「・・・わかったわ、一緒に・・・捜索隊になりましょ」

まあ、こうでもしないと真実なんて見つけれないだろうし、なにより面白そうだしね

「え？ほ、ほんと！？やったあ！」

ミジユマルが大はしゃぎで喜ぶ

「それじゃあ、私達一緒に捜索隊になるんだし、私の本名、教えてあげるね」

あつちは本名じゃなかったのね・・・まあ、よく考えてみればそうよね・・・

「私の名前、本当はミルって言うの」

「改めて、よろしくね！リン！」

「ミル、これからもよろしく！」

「さあて、それじゃあ、ギルドに入りましょ！」

「うん！」

サッサッサッ・・・

ギルド 内部1F

中に入ってみると、そこには、梯子が一つ下へと続いていた

「え〜と・・・とりあえず、この梯子を降りていきましょう」

ギルド 内部2F

はしごを降りてくると窓が左右に取り付けられていて、外からの光で部屋全体が明るくなっている

そして、至る所にポケモン達が居る

よく見れば、大体2、3匹集まっている

「思ってたより、搜索隊って多いわね・・・」

なんか選ばれた精鋭みたいなものかと・・・

「まあ、搜索隊になる事自体は難しい事じゃないらしいからね」

「そうなんだ・・・」

「あれ〜？ミルなにやってんの？」

私たちの後ろから声がする

しかも、ミルって言うてたし・・・

振り向くと、水色の体と青色の腹巻きみたいな物を付けていて、その左右にホタテがくつついてる・・・あと、尖った白い髭が横に二本生えてる・・・

「あ、お姉ちゃん」

やっぱりか・・・

「あのね、私達これから搜索隊になろうと思ってるんだ！」

「ふうん・・・」

「で、横にいる子は？」

なる事には無関心！？

「私と搜索隊やってくる、リン」

「あ、こんにちわ・・・」

「・・・まあ、とりあえず、ここのギルドに入るんでしょ？」

「うん、そのつもり」

「だったら着いてきなさい、親方様のところまで案内してあげるから」

そう言うのと、下に下る梯子へ歩いて行き、梯子を伝って降りていった私たちも一緒に下に降りていった

ギルド 内部3F

3階も部屋の作りは2階とほぼ同じで、違う所とすれば、通路が左

右に続いてるって言う所だろうか・・・

「さ、こっちこっち」

梯子を降りて、すぐ横にある扉の前にミルの姉が立っていた

コンコン

「親方様へ志願者来ました」

ミルの姉は不思議なマークの付いてるドアをノックして、中に居る親方様？に声を掛ける

「入ってきていゝよ」

部屋の中から女っぽい声が聞こえてくる多分、この声の主が親方様なんだと思う

「それじゃあ、お邪魔します」

キィィ・・・

ミナの姉は、ドアに手を掛けて、ゆっくりと開けていった

「さ、入った、入った！」

ミナの姉に言われて、私たちは、部屋の中に入っていった

「うわっ！な、なんじゃこりゃ・・・」

部屋に入ってみれば、部屋には、変な機械みたいな物があつて、部屋の一番奥には、クリーム色の体を持つてるポケモンがいた

「親方様へ来ましたよ」

「あいよ」

「よつと・・・」

親方様と呼ばれてるポケモンはゆっくりと立ち上がって、そのままこっちを向いた

クリーム色の体に、黒の足や、水色の腰や尻尾、細い腕やスラツとした体格、それに、犬のように出っ張った鼻、尖った耳、胸や手の甲にある出っ張り・・・

・・・分らない・・・こんなポケモン・・・居るの？

「こんにちわ・・・私がこの親方・・・いわば、リーダーよ」

「それで、ミュ、この二人が志願者って訳ね？」

「はい、それで、こっちの方がうちの妹です！」

ミルの頭を撫でながら言う

なんだろう・・・寂しい・・・

「へえ・・・」

そう言つと、親方様と呼ばれているポケモンは目を閉じた

・・・？何やってるの・・・？

「やっぱり、姉妹だと波動の色は同じね・・・コバルトブルーの波動・・・」

「え？」

は、波動？どういう事？

それに、波動の形って・・・

まるで見えてるみたいじゃない・・・！

「どういう事？お姉ちゃん」

「うちの親方様ね、ルカリオって言う別の大陸から来たポケモンでね・・・」

ルカリオ・・・それが、あのポケモンの種族名・・・

「それで、ルカリオって言うポケモンには、全ての物の波動を読みとる力があるんだって・・・」

全ての物の・・・波動を？

「凄いね・・・」

「まあ、この力を使う機会は、そんなにないんだけどね・・・」

「それじゃあそっちの子の波動は・・・」

「マカライトグリーンの波動ね・・・」

「うん、二人共、いい波動を持つてるね・・・」

「搜索隊の素質は十分にありって感じかな？」

波動だけで、そこまで分かるの・・・？

「じゃあ、最後に聞くけど・・・本気で搜索隊になる？」

「はい！なります！」

「私も！」

「よし、その意気込み・・・忘れちゃだめだよ？」

「それじゃあ、搜索隊のチーム名は何にするの？」

「チーム名？」

「うん、搜索隊は、活動するのに、チーム名は必要だからね」

「ミルは、何かある？」

「ううん、何も・・・」

「ていうか、お姉ちゃんは、何にしてるの？」

「私？私は「ウォールズ」にしたよ？」

「ウォールズ・・・」

「じゃあ、私達は・・・」

「ウイング・・・なんてどう？」

ミルに提案する

「ウイング・・・いいね！」

「それにしよ！かつこいいし！」

「チームウイングね」

そういうと、ルカリオの親方様は、紙を取りだし、紙に何かを書きはじめた

「よし！」

書き終わると腰に掛けているバックに紙を入れた

「これでチーム名はいいわね！」

「さてと、じゃあ搜索隊になった訳だし・・・」

「搜索隊の証をあげないとね！」

「あ、ミユは、外で待っててくれる？」

「わかりました」

そう言うミルの姉のミュは、外に出ていった

「それじゃあ、搜索隊の証をと・・・」

座っていた場所のすぐそばにおいてあったタンスを開けて、そこから箱みたいな物を取り出した

そして、私達の前に戻り、その箱を置いた

「さ、開けてみて？」

私は、言われるがままに開けてみた

パカッ

中に入っていたのは・・・

「地図にバッチ・・・？」

「うん、志願者にあげる物は三つ！」

「一つは、この大陸が載っている地図」

「二つ目は、そのバッチ、必ず持っていないとダメ、搜索隊の証よ。」

「そのバッチには、二つの機能があって、一つはポケモンをダンジョンから救助するための転送機能、二つ目は依頼をクリアした時に

もらえる救助ポイントを加算する計算機能よ」

凄いハイテクなバッチね・・・これ

「それで、三つ目なんだけど・・・」

「二人は、肩に掛けるバックか、腰に掛けるバッグ・・・どっちがいい？」

「肩に掛けるのと・・・腰に掛けるの？」

「リンは、どっちがいい？」

「私は、腰に掛ける方がいいわ」

「私も！」

「それじゃあ、決まりね！」

そう言うとお方様は、箱を取り出した時と同じタンスを開けて、中から、腰に掛けるバッグを二つ取り出して、私達に渡した

「3つ目は、ダンジョンを探索してる時に手に入る道具を入れるバッグ！」

「これがダンジョン探索では必要不可欠の道具！」

「これで、搜索隊に必要な道具、渡したわね」

「さあ、明日から本格的に活動してもらっわよ！」

「頑張つてね！チームウイング！」

『はい！』

こうして、始まった・・・

私達の・・・

チームウイングの・・・

世界を救う冒険が・・・

でも、まだこの時は、知るよしもない・・・

第3話 ギルドに入門！（後書き）

はい、第3話 完 です

次回はいつ頃かな？

ゆっくりしていつてね！

第4話 明日から活動開始（前書き）

はい、第4話完成です

大分更新スピードあがりましたね

・・・七不思議をのぞいて・・・

それでは、どうぞ！

第4話 明日から活動開始

第4話 明日から活動開始！

「さて、今日から搜索隊になった訳だけど・・・」

「うちのギルドは住み込み制で働いてもらっよ」

（住み込みなんだ・・・）

「おい！ルミっ！」

親方様が外で待っていたルミを呼ぶ

キィィ・・・

「はっい、なんでしょうか？」

扉を開け、ルミが入ってくる

「この子達を開いてる7番部屋に案内してあげて」

そう言う親方様は、バッグから鍵を取り出し、ルミに渡す

「了解です！」

「それじゃあ、頼んだわよ」

「はっい」

「じゃあ、二人共、着いてきて」

リン達はルミの後に続いて歩いていった

3F 廊下

部屋のすぐ横にある廊下を歩く

廊下は木製の扉と扉に挟まれていた

扉をよく見ると、「3」と書かれたプレートと「シャイニング」と書かれたプレートが貼られていた

(・・・シャイニングってチーム名よね・・・)

「えーっと、7番部屋は・・・ここね」

ある扉の前で止まった

扉には、「7」と書いてあるプレートだけ貼ってあった

ルミは手に持っていた鍵を扉の鍵穴に差し込み、回す

ガチャ

キイイ・・・

「ここが、二人の住む部屋よ」

リン達が部屋の中を見回す

部屋は、四角形で、窓が1つある平らな石壁、草の生えている土で出来ている

部屋には、本の入っている本棚や戸棚があり、部屋の隅には、普通は見ない4段ベットが置いてあった

「うわ・・・凄い・・・」

「搜索隊は、危険だけど、稼ぎはいいからね」

「あ、そろそろ就寝の時間だから、明日に備えて早めに寝とくのよ」

「はい」

「じゃあ、私は親方様に報告してくるから！」

そう言うのルミは親方様の部屋に歩いていった

「うわ、外、もう真っ暗じゃん！」

「私達がダンジョンから出たの夕方だからね・・・」

「早めに寝といた方がいいってお姉ちゃんも言ってたし、寝る準備をしましょう」

「そうね」

キィィ

リンは開いていた扉を閉めた

3F 親方様の部屋

コンコン

誰かがノックをしてくる

「親方様〜ルミです」

「入っていいわよ〜」

ガチャ

ルミが扉を開け、入ってくる

「親方様、二人を部屋に案内しました」

「そう、ありがとうね」

「親方様〜、何作ってるんですか？」

「これ？通信機」

「なんで通信機なんか作ってるんですか？」

「内緒よ、それより、今日来たツタージャの子、どう思う？」

「え？どう思うって・・・まあ、いいんじゃないですか？」

「まあ、確かに搜索隊としての素質は十分にあるわ・・・」

「けどね、おかしいのよ・・・波動が」

「波動がおかしいって・・・どういう事ですか？」

「うん、波動は種族事に色は違うけど、形は種族関係なく共通の筈なのよ・・・」

「けどね、あの子は違う・・・」

「普通は波紋状なんだけど・・・あの子は螺旋状だった・・・」

「これ・・・どう言う事が分かる？」

「どう言う事って・・・あの子はポケモンじゃない・・・って言うたいんですか？」

「うん、だって、そうしか考えられないんだもの・・・」

「思い違いじゃないですか・・・？」

「だって、ツタージャなのにポケモンじゃないって・・・矛盾しますし・・・」

「・・・そうよね」

「私だって、全てのポケモンを見た訳じゃないし・・・」

「もしかしたら、何か凄い才能を持つてるって事かもしれないしね」

「ごめんね、なんか付き合わせちゃって・・・」

「いいえ、暇でしたから・・・」

「それじゃあ、私はそろそろ戻りますね」

「あ、この事はみんなには内緒ね」

「分かりました、それじゃあ・・・」

「うん、おやすみなさい」

ボタン

3F 7番部屋

「よし、これでいつでも寝れるわね」

木製のベットに置いてあった毛布や枕を敷いて、いつでも寝れるようにセツトした

「じゃあ、早速だけど寝よっか」

「うん」

「私は一番上！」

ミルが4段ベットに立てかけてある梯子を上って、一番上に上る

「私は、3段目つと」

私も梯子を上って、ミルの下のベットに寝ころぶ

「うわぁ〜ふつかふか・・・」

「気持ちいい・・・」

「・・・今日っているんな事があつたよね・・・」

「うん・・・」

「ダンジョンに入ったりとか、搜索隊になったりとか・・・」

「でも、これからも色々な事が起きるんだろうなあ・・・」

「リンがポケモンになった理由とか・・・分かるのかな・・・」

「分かんないよ・・・けど、探さないよりはマシだしね・・・」

「・・・そろそろ寝よつか、明日から仕事だし・・・」

「そうだね・・・お休みなさい・・・」

「うん、お休み・・・」

私はゆっくりと目を閉じた

もし見つかなかつたら・・・どうしようかな・・・
・・・まあいつか、今考えてもなんも意味ないしね・・・
ミル・・・明日からがんばろうね・・・

第4話 明日から活動開始（後書き）

はい、第4話 完 です

七不思議も書かないと駄目だけど、めんどくげフンゲフン、ネタが
浮かばないからなあ・・・
どうしよう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7159x/>

ポケモン不思議のダンジョン 理想の搜索隊

2011年12月25日20時45分発行